校 長 室 だ よ り（No.5）

令和４年５月19日
丹波市立黒井小学校長
谷口　千尋

丹波市では、災害の発生を完全に防ぐことは不可能であることから、災害時の被害を最小化する「減災」の考え方を基本に、たとえ被災したとしても人命が失われないことを最優先とし、また、経済的被害ができるだけ少なくなるよう、さまざまな対策を組み合わせて災害に備えることとしています。

梅雨時期を控え、毎年、確認していることですが学校が避難所となることを想定した説明が、丹波市くらしの安全課からありました。学校が避難所になるのは、住民センター等での避難所が設置されてからのこととなりますが、各校の体育館にも防災用品が備えられ災害時に備えられています。

私もこれまでに学校が避難所になることを２度、経験しました。一度目は、平成23年です。この年は、５月に台風２号が接近、７月には台風６号、９月には台風12号、15号と３つの台風が日本に上陸しました。12号の時には、丹波市災害対策本部は、市内全域に避難準備情報が発令され、その後、高谷川の水位が上昇し、柏原、氷上の一部地域に対し避難勧告が発令されました。崇廣小学校も体育館を避難所にしました。ご高齢の方、数名が避難してこられたのを記憶しています。

二度目は、平成26年８月16日からの豪雨です。丹波市にとって過去に類のない最大級の土砂災害を引き起こす災害となりました。当時は、竹田小学校に勤務していましたが、道が川となり、夜中に学校までたどり着くのがやっとでした。学校も危険と判断され、一度は、避難所となりましたが、避難された方を別の施設に送りました。校長先生と２人、学校に取り残されました。夜半に校舎が浸水を始めたため、２人で様々なものを使って必死で排水を試みました。気が付くと朝になっていました。雨はやみましたが、学校の隣を流れる川は、イグアスの滝（見たことはないですが…）のようでした。運動場にも土砂が流入し、なんと鹿が一頭、流されてきていました。

このことから、大切にしたいことが「伝える」「備える」「活かす」です。阪神・淡路大震災の時から言われ続けていることですが、一つ目は、災害の経験を次の世代にしっかりと伝えなければならないと考えています。二つ目は、次の災害に対して、万全の備えをしていくことです。南海トラフ地震のみならず、集中豪雨や台風、過去の災害と比べて被害規模が大きくなりつつあることも踏まえ、避難等を早めにしていく事が被害の縮減につながると考えます。三つめは、活かすです。平成26年に丹波市が経験したことを様々な面に活かすことが大切です。災害ボランティアにしても、災害を経験した市として分かることや、できることがあると考えます。「伝える」「備える」「活かす」大切にしたい言葉です。

今後、丹波市立の学校として地域並びに市民の生命、身体及び財産を様々な災害から保護するため、県、指定地方行政機関、指定（地方）公共機関及び公共的団体等と協力、協働しながら防災活動をすすめるとともに、教育機関として、平常時から児童への防災教育をすすめ、防災意識を高めていきたいと考えます。